広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古典教育に活かす連歌の文学性 ： 中世に隆盛を極めた連歌の本質的な面白さに迫るために
Author(s)	黒岩，淳
Citation	国文学攷 ， 245 ： 25 - 34
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049734
Right	Copyright (c) 2020 by Author
Relation	

古典教育に活かす連歌の文学性

――中世に隆盛を極めた連歌の本質的な面白さに迫るために――

黒岩　淳

はじめに

日本古典文学の歴史を振り返った時、中世から近世の初めにかけて、連歌が盛んであったことは知られている。しかし、高校の授業においては、「菟玖波集」「新撰菟玖波集」などの連歌集の名や二条良基、宗祇といった編者や連歌師の名前を知識として教えることはあっても、連歌の作品自体を鑑賞することは稀であると思われる。

その理由として、教師にとって、連歌とは何か、イメージしにくく、よくわからないからということがあったと考えられる。勿論、詳しい人もいただろうが、一般的な理解としては、五七五の長句と七七の短句を交互に付けていくという文芸で、式目と云う煩瑣なルールがあるようだという程度なのではないだろうか。

連歌がどのようにして詠まれてきたのか、また、連歌が詠まれた場というものがどのようなものであったのか、また、どこが面白いのか、ということなどを想像することが難しいと思われるのである。(1)

明治以降、西洋文化が重視され、文学は、「個人の思いを表出するもの」という考え方が主流となり、共同で詩を紡いでいく「連歌」や「俳諧」といった座の文学が軽視されるようになったということもあるだろう。また、現実的な問題として、連歌の作品が収録されている教科書が少ないということもある。(2)

さて、高校の古典教育において大切なことは何か。文法を学んで古文を読解する力を付けることも大切であろう。しかし、ただ訳することができれば良いというものではない。より大切なのは、古典の魅力や古典を読む楽しさを実感することだろう。古典を通して、古人の心を感じる面白さを知ると、生涯を通して古典に親しむことにもなるだろう。

そこで、そのような視点で連歌を考えてみたい。他の物語や韻文

などに比べて、連歌作品を読んで面白さを感じることは難しいと思われる。なんとなく内容はわかっても、どのような式目によって、句が付けられているかということを理解しないと、鑑賞しにくいからである。

しかし、授業の仕方を工夫することにより、連歌を味わうことは可能であると考える。連歌の豊饒な世界を知ることは、もっと重視されてもよいように思う。[3]

本稿は、そのような視点から、連歌の文学性について整理し、連歌の授業について考察したものである。なお、ここでの「文学性」とは、「言葉によって表現された作品として面白さを感じさせる要素」という意味で使用したい。[4]

一　連歌の文学性

では、その連歌の文学性はどこにあるのか、他の文芸とどのような点が異なっているかということを中心に整理しておきたい。

(1)　共同創作―前句を活かす

連歌は、他者の句に自分の句を付けて一つの世界を創り出す。そして、その自分の句に又他者が句を付けることで、別の世界が描き出される。[5]

付け方はいろいろあるが、前句の世界にうまく繋げて、前句の世界を広げて行ったり、前句を引き立たせていったりするように詠むことが求められる。そこでは、自己を強く主張するだけでは良い付けとはならない。いくら技巧を凝らしたり、新しい趣向を加えていても、前句と繋がらなければ意味をなさない。

連歌は、「調和と変化とを以て生命とす」と言われる。[6]その調和という点から、一巻全体を考えた場合、技巧的な句、重たい句ばかりが続くことは避けなければならない。平凡なさらりとした句―遣り句も必要なのである。人生に順調な時もあれば苦しい時もあるように、連歌一巻の中で、内容的に重たい句や、表現的に凝った句もあれば、さらりとした句もあった方が望ましいと言える。さらりとした句があればこそ、技巧的な句が映えるとも言えるであろう。

連歌において「花」の句は、特に重要な句とされている。「花」といえば、桜を指し、詠む場所があらかじめ決められている定座(じょうざ)もある。里村紹巴の「至寶抄」に「貴人功者ならでは平人は斟酌ある事なり」とあるように、花の句は、高い地位にいる人や連歌巧者が詠むものとされていた。[7]「花をもたせる」という言葉は、功績を相手に渡すことを意味するが、花の句を譲ることからきていると考えられている。

自己を強く主張するのではなく、他者の句に合わせて調和を図りながら句を付けていくところに、連歌という文芸の大きな特色があると言えよう。

(2)　発想の転換―一貫したテーマがない

物語や小説等の文学作品は、一般にテーマが重要な問題として考察される。しかし、連歌一巻には一貫したテーマがない。これもまた、連歌という文芸の大きな特色である。連歌は四季折々、神祇釈教恋無常、様々なことを詠む。そうであるがゆえに、どうなるかわからない人生を象徴することにもなる。

連歌は、古来百韻を基本とするが、現代連歌では、四十四句詠む世吉（よよし）形式が一般的である。その一巻の中で多くのことを表現する。連歌では、「停滞することは最も忌むもの」[8]とされる。同じ内容を詠み続けるようなことがあってはならない。停滞することなく新しい境地を次々と詠んでいかなければならないのである。

したがって、句を付ける時には、前句に合うような内容にすると同時に、もう一つ前の句―打越（うちこし）から離れなければならないということにも気を付けなければならない。打越に戻ることを輪廻（りんね）と言って、避けるべきこととされているのである。

そして、そのために、式目があると言ってよいだろう。式目を守っていると、自然と様々な内容を詠むことになるのである。

（3）当座性

連歌の特質として、当座性ということも重要である。座に連なり、句を付ける、または句が付けられるその時、その時が面白いのである。

句を付ける時は、前句から連想して句を考えるのだが、打越の句の内容に戻らないように、また式目に抵触していないか注意しながら考えることになる。その時、句がすぐに閃く場合もあれば、なかなか閃かない場合もある。以前の体験を思い出す場合もあるし、ある言葉から、途方もない空想につながっていく場合もある。

早く詠んで句を出さなければ、他の連衆に先を越されてしまうので、一生懸命に考えることになる。連歌の座に座っていると、時間が経過するのがとても速く感じられる。

連歌会での出句の方法は、音声による場合と、小短冊を使用して行う場合がある。「連歌初心抄」の「会席之事」には、「執筆に向ひ句を出すには長句なればまづ五文字を出し、執筆うけたらば、跡十二文字を出すなり。短句なれば七文字出し、又跡七文字を出すべし」とある。[9]また、同書の「会席廿五禁制之事」には、「連歌低く出して執筆に問るゝ事」という項目があることなどから、声を出して句を付けることが一般的だったと考えられる。[10]

句を声に出す時は、気恥ずかしい気持ちを伴う。そこで、現代連歌では、小短冊を使用する場合もある。音声でするか、小短冊でするか、一長一短がある。

（4）伝統的美意識への繋がり

連歌では、「本意」というものを重視する、里村紹巴は、「至寶抄」の中で「連歌に本意と申事候、たとへば春も大風吹、大雨降共、雨も風も物静なるやうに仕候事、本意にて御座候、春の日も事により

て短き事も御入候へども如何にも永々しきやうに申習候」[11]と述べている。春に激しい雨が降る時もあるのだが、「春雨」といえば、「静かに降る雨」がイメージされ、それが「本意」とされる。つまり、本意とは「伝統的に形成された、もっともそれらしい性質」と言って良いだろう。連衆が共通して持つそれらのイメージをもとに、連歌の世界が表現されていくのである。

また、連歌では季語が重視される。季語がある句が季の句であり、そうでない句を雑（ぞう）の句と言う。式目上、春、秋の句は三句か五句まで続けねばならない。夏と冬の句は一句でもいいし、三句まで続けることができる。途切れたら、七句、間を空けなければならないという式目もある。したがって、季語の理解は重要なのである。

この季語もまた、伝統的に形成されてきたものと言えよう。たとえば「月」は秋の季語となっている。一年中出ているにも関わらず、秋の季語とされたのは、秋の月が美しいと感じてきた、古人の美意識が受け継がれてきたためと言ってよいだろう。

（5）和語の使用

連歌とよく似た文芸に「連句」がある。純正連歌から俳諧連歌が派生し、江戸時代にはその俳諧連歌が盛んになる。それが、明治以降、「連句」と称せられるようになったと考えられている。

では、連歌と連句はどう違うのだろうか。

簡単に言えば、使用する言葉の違いと言ってよいだろう。連歌は、和語で詠む。漢語や俗語は「俳言」と言って基本的には使用しないのである。[12]一方、連句は、カタカナ語も含めて俳言や口語も自由に使う。言葉に制限がないと言えるだろう。

また、転じ方については、一般に、連句の方がその転じ方は大きいように感じられる。

二　具体的授業方法

連歌という文芸の文学性について考えてきた。では、どのような授業にすると、それらを学ばせることができるだろうか。具体的に考えてみたい。

（1）「水無瀬三吟百韻」の鑑賞

まず、連歌という文芸の概略をつかませるために、作品を示したい。そのためには、古来模範とされてきた「水無瀬三吟百韻」や「湯山三吟百韻」がよいだろう。[13]しかし百韻全部を取り上げる必要はなく、表八句もしくは、余裕があれば初折表裏の二十二句でよいだろう。式目すべてを取り上げているとかなりの時間がかかってしまうので、次の点を抑えたい。

①五七五の長句と七七の短句が交互に繰り返されている。（生徒に気づかせ、指摘させる。）

②季語が使われている季の句と使われていない雑の句がある。（季語を見つけさせ、その季節を指摘させる。）

③季の句の連続と句去。（春・秋は三～五句。夏・冬は一～三句。同季七句去。さまざまな季節が詠まれることになる。）

④発句、脇句、第三の句の特性。

⑤月、花の定座。（「月」「花」の重要性。）

⑥和語の使用。[14]（余裕があれば、俳諧と比較をさせ、その違いを指摘させる。）

⑦式目に関わる句材。（簡単に触れる程度で良いだろう。）

水無瀬三吟百韻　賦何人連歌

（初折表）　（季）（句材）

一　雪ながら山もとかすむ夕べかな　宗祇　春　降　山　聳　夕

二　行く水とほく梅にほふ里　肖柏　春　水　木　居

三　川風に一むら柳春見えて　宗長　春　水　木

四　舟さす音もしるきあけがた　祇　雑　水　朝

五　月や猶霧わたる夜に殘るらん　柏　秋　光　夜　聳

六　霜おく野はら秋は暮れけり　長　秋　降

七　なく虫の心ともなく草かれて　祇　秋　虫　草

八　垣根をとへばあらはなる道　柏　雑　居

三句去・・降物（雪・雨等）。光物（日・月・星）。聳物（霞・霧）。

五句去・・山類（岡・峰）。時分（夕・夜・朝）。水辺（川・海）

植物（木・草・竹）。居所。（里・宿）。動物（獣・鳥・虫）

※植物、動物の下位分類は、三句去。

（2）連歌の実作

教室を一つの座と見立てて句を付けさせる方法を考えたい。

用意させるものとしては、季語集と古語辞典、文法書。現代語から古語を引くことの出来る『現代語から古語を引く辞典』（芹生公男・三省堂）なども参考になる。

授業前に、句を書き込める懐紙と小短冊数枚を配付しておく。

授業では、前句を示し、付句をその場で考えさせる。発句を示して脇句から付けさせてもよいだろうし、前の時間に示した連歌作品の最後の句に付けるように指示してもよいだろう。生徒の状況に応じて、可能であれば文語、歴史的仮名遣いで創作させたいと考える。古典の文法学習にもつながるからである。

付句を考えさせる時に、最初はさまざまな付け方があることを示したい。マインドマップを書かせてみてもよいだろう。キーワードを中央に置き、そこから放射状にキーワードやイメージを広げ、つなげていくのである。たとえば、

八　垣根をとへばあらはなる道

の付句を考えさせるのであれば、「垣根」「あらはなる道」それぞれから、連想する言葉を放射状に書かせる。

「垣根」からは、「壁」「庭」「家」「崩れ」「猫」などの言葉が連想されよう。「あらはなる道」からは「風」「砂」「土」「寂しさ」「恥ず

かしさ」「意外性」などが連想されるのではないかと思われる。

思いつくまま書かせた後で、式目上、詠めない句材について、考えさせる。連歌は前句に戻らないようにしなければならないことを改めて指摘する。打越（二つ前の句）「なく虫の心ともなく草かれて」に「虫」という動物（うごきもの）があるので、「猫」は詠めない。また「草」があるので、植物（うえもの）も詠めないのである。

小短冊に書かせ、出来た者は、その場で提出させる。数句集まったところで、その中から教師が採択。どのような句が提出されたのか、なぜその句を採択したか説明したい。文法的な誤りがあれば訂正して示す。板書してもよいのだが、その際、書画カメラ（実物投影機）を使用すると効果的であろう。一時間に、三～五句程度は付けていく。二時間で八句程度を完成させることができるのではないだろうか。

さらに時間があれば、グループに分け二～三時間かけて創作させてもよいだろう。完成させた作品は、プリントにして発表会を設けたい。

作品が完成した後は、自分の付句について、振り返らせる。

①前句をどのように鑑賞したのか。

②付句で、どのようなことを表現しようとしたのか。

③難しかった点、工夫した点。

他の人の句については、良いと思った句を選ばせ、どのような点が良いと思ったのか、説明させる。

また、各班ごとにプロジェクタを使用して作品を映しだし、工夫した点等、説明させるとよい。同じ前句から始めても、さまざまな展開が見られ、盛り上がるであろう。

最後に、連歌を創作して感じたことをまとめさせて、連歌の魅力を共有させると有意義である。

（3）指導上の留意点

実際に授業を行う上で、次のことに注意したい。

①既に使われている言葉は使用しない。

生徒に付句を作らせるとついつい前句にある言葉と同じ言葉を使ってしまう。前句に引きずられたり、前に戻ってしまったりしがちなのである。連歌は展開が大切であることを強調し、同じ言葉は使わないようにすることを意識させる。

②思いつかない生徒への対応。

思いつかない生徒には、前句から連想したことやイメージしたものを説明させる。それをもとに班員で句を考えさせてもよいだろう。

グループで創作させる場合は、作者が偏らずに、できるだけ班員が同じ句数詠むのが望ましいことも、あらかじめ伝えておきたい。

（4）課題

今後、連歌の授業を充実させていくための課題を整理しておく。

［1］指導法の体系化、理論化

寺島徹氏が述べられているように、実作者だけが行えるような方法ではなく、授業者の誰もが行えるような方法を考えていく必要があるだろう。[15] 式目、つまりルールを簡単なものにすることにより、指導はしやすくなるはずである。最初の段階では、同じ言葉を使わないことと、季節のルールに従うことだけでもよいと思う。生徒が慣れてくると、少しずつ段階的に制限を設けていけばよいのではないだろうか。

古典の授業としては、韻文を指導する上で、次のような文学史上の流れを意識した指導もあって良いだろう。

和歌（万葉→古今→新古今）
←
連歌（水無瀬三吟百韻、湯山三吟百韻等）
←
俳諧（歌仙「市中は」等）
←
俳諧の発句（芭蕉、蕪村、一茶等）

［2］評価方法

創作においては、どのように評価するかは難しい。寺島徹氏が指摘するように、「創作のプロセスを評価する教師側の視点の開発が重要」であると考えられる。[16]

句そのものの出来よりも、振り返りを記入したプリントの記述内容や、自己評価のプリントを踏まえて評価することになるだろう。

［3］教育環境の工夫

①書画カメラやパソコン室の利用

「当座性」という特質を重視するなら、句が提出されると同時に、授業に参加している全員が、その句について考えたり味わったりすることが望ましいと言える。そのためには、書画カメラを使って、生徒の書いた句を映し出して皆に紹介したい。一句一句板書するよりも時間がかからないので、付句の数も増え、進行が捗ると思われる。

パソコン室を利用して、付句をパソコンに打ち込んで提出させると、生徒は句を提出する抵抗感が少なくなるので、授業を進めやすいだろう。ただし、授業者が、生徒の提出したデータ処理の方法に習熟しておく必要がある。

②電子メールやラインの活用

授業中に、グループ内で付句がうまくできなかったり、滞ったりした場合は、自宅に戻ってからメールで続きを創作させたり、ライングループの中で、句を付けさせていくことを勧めてもよいだろう。

三　発展的学習

古典の授業にとどまらず、連歌の楽しみ方は、いろいろな方法が

ある。[17]

（1）校内連歌会

クラスを越えて、学年を越えて連歌を楽しむことが出来る。毎年行うようになれば、三年生が宗匠となり、後輩たちを教えながら作品を作り上げることができるであろう。

（2）他校との交流連歌会

すでに、行橋市の連歌大会や京都では、さまざまな学校の生徒が混ざって、一座となり、作品を作り上げている。他校との交流は、さまざまな分野で行うことができるだろうが、文芸分野の一つとして連歌も加えると、相互交流が進むはずである。

（3）世代を越えた交流連歌会

学校の枠を越え、一般の大人とともに参加することにより、座は活性化されるであろう。大人から学ぶことも多いに違いない。

（4）他の文化芸術とのコラボ

連歌と香道とのつながりも古い。[18]お香を焚きながら連歌をすると、お互いの文化芸術への理解が深まると思われる。また、お花を活け、お茶会を同時に開催することで、日本の伝統文化への親しみが増し、その魅力を実感することになるに違いない。

終わりに

連歌は、前句を生かしつつ自分の句を付けていく。前句をうまく生かしつつ新しい世界を描くことができれば、それは、付句作者にとっても喜びであり、また前句作者にとっても嬉しいことなのである。その共同制作の喜びがあればこそ、中世の時代に、あれだけ流行したのであろう。

言葉を付けることの楽しさや喜びを感じる体験は、授業の中でも体験することが可能であると考え、具体的方法を考察した。生徒の実態に応じて、式目を緩和したり、用語を自由にしたりすれば、可能性は広がるに違いない。

言葉をつないで心をつなぐ「連歌」。その文学性に、改めて注目し、生徒に、そして後世に伝えていくことができればと思う。

注

（1）山田孝雄は、「連歌研究の序説」の中で、連歌研究が進まない要因を指摘している。それは、①江戸時代末には既に衰微の域に入って、連歌を知り学ぶものが少なくなっていたこと。②明治維新の当時盛んだった旧物破壊の思想と実利主義のために、連歌は無用の長物とされたこと。③西洋流の研究法によっては、連歌は理解できなかったこと。④連歌は容易に知り難いこと、などである。『思想』第六十七号（一九二七年五月特集号・岩波書店）

福岡県行橋市の須佐神社では、享録三（一五三〇）年以降、夏の祇園祭において連歌が奉納され続けている。そして、今井祇園連歌の会では、毎月連歌会を催し、私も参加し連歌の実作を続けている。連歌会に参加して初めて理解できた点は頗る多い。現代において連歌会を催して

いるところは少しずつ増えてきているが、全国的にはまだまだ少ないと思われる。拙著『連歌の息吹―つながりひろがる現代の連歌』（渓水社・二〇一六年）

（2）令和元年の時点で、連歌作品を収録しているのは、三省堂「古典Ⅱ」（「水無瀬三吟百韻」の表八句）のみである。

（3）連歌の授業については、小村典央氏・道工尊之氏が、中学校で「座の衆議による連歌実作」を取り入れた授業を実践している。（令和元年度大阪教育大学附属平野中学校研究発表会　公開授業）

また、福岡県行橋市の中学校でも、連歌の実作会が行われている。

清川美恵子「『連歌』にふれる―校内連歌実作会を通して―」『北九州国文』四六号（福岡県高等学校国語部会北九州地区部会・二〇一九年三月）

筆者も今までに何度か授業に取り入れたり、考察したりしたことがある。拙著『連歌と国語教育―座の文学の魅力とその可能性―』（渓水社・二〇一二年）、拙稿「高校における連歌の授業」『西日本国語国文学』第五号（西日本国語国文学会・二〇一八年十月）

（4）連歌の面白さを解説したものとして、次の論考が参考になる。

鈴木元『つける―連歌作法閑談―』（新典社新書・二〇一二年）岡崎真紀子「湯山三吟百韻―薄雪に木の葉色こき・・・（表八句）」（『高校生からの古典読本』平凡社ライブラリー・二〇一二年）深沢眞二「想像力のあそび―連歌」（『ともに読む古典　中世文学編』笠間書院・二〇一七年）

また、ジャズとの共通性を指摘した論考もある。マック・ホートン「連歌とジャズ」（『国際化の中の日本文学研究』風間書房・二〇〇四年）

（5）一人で句を連ねていく「独吟」という形式もあるが、今回の考察では除く。また、句の採択は宗匠が判断するので、一巻全体は、宗匠の作品と言えなくもない。

（6）山田孝雄『連歌概説』（岩波書店・一九三七年）六七頁

（7）「至寶抄」『連歌論集　下』（岩波文庫・一九五六年）一三三頁

（8）注6に同じ　五一頁

（9・10）『連歌法式綱要』（岩波書店・一九三六年）三二八頁

（11）注7に同じ。二三三頁

（12）今井祇園連歌の会では、各折に一か所程度、三句という制限を設けて俳言を認めている。

（13）拙稿「『水無瀬三吟』の教材化―連歌の鑑賞から創作へ―（数研国語通信『つれづれ』二九号・二〇一六年五月）「心と言葉をつなげる連歌創作指導―『水無瀬三吟百韻』の鑑賞から創作へ―」（『国語教育研究』第五七号・広島大学国語教育会・二〇一六年三月）「『湯山三吟百韻』の学習指導―連歌を位置づける古文の単元学習―」『月刊国語教育研究』五四〇号（日本国語教育学会・二〇一七年四月）

（14）石塚修氏は、連歌の指導の前提には、和語とくに歌語（雅語）の理解が不可欠であると指摘されている。「想像力を育成するための古典の授業とは」（『月刊国語教育研究』四九七号・二〇一三年九月・日本国語教育学会）

また石塚氏は、和歌を指導することは「和語」についての理解を深めることであると述べられており、和歌を「詠む」ことの指導や「和歌リテラシー」の涵養を提言されている。「国語科教育からみた和歌指導のゆくえ」（『和歌文学研究』一一二号・二〇一六年六月）

（15）寺島徹「文学創作の学習指導（高等学校）第三章　詩・俳句・連句・漢詩を作る」『中学校・高等学校　文学創作の学習指導―実践史をふまえて―』（渓水社・二〇一八年）一四八頁

（16）注15に同じ。一五〇頁

（17）学級日誌を使用して、連歌作品を完成させるということも行っている。

（18）実際に連歌会で香が焚かれることがあった。綿抜豊昭『連歌とは何か』

（講談社選書メチエ・二〇〇六年）四六頁

濱崎加奈子氏は、香道について「連歌的原理によって切り結ばれた嗅覚と言語の芸能」ととらえている。『香道の美学―その成立と王権・連歌―』（思文閣・二〇一七年）

―くろいわ・あつし、福岡県立北筑高等学校教諭―